

喜びの叙勲祝賀会／長瀧名誉教授

2月25日、平成28(2016)年秋の叙勲で瑞宝中綬章を受章した東京工業大学名誉教授で、本誌編集委員会顧問でもある長瀧重義氏の叙勲記念祝賀会が第一ホテル両国(東京・墨田区)で開催され、東工大・新潟大時代の研究室の教え子を中心にセメント・コンクリート業界などから約240名が参集した。

長瀧氏は1937(昭和12)年生まれ79歳。東京大学を卒業後、63年同大学工学部専任講師を経て、65年から東京工業大学工学部土木工学科助教授、80年から教授。東工大の退職後には、新潟大学、愛知工業大学でも教壇に立った。大学在職中は一貫してコンクリートおよび鉄筋コンクリートの教育・研究に従事し、コンクリートの高性能化、高機能化を目指し、高強度化、早期強度化、高耐久性化、高流動化で顕著な業績を挙げ、学協会等から高く評価された。また、自身の研究に関連して、セメントを始めとするコンクリートの各種構成材料から、生コンクリート、プレキャストコンクリートといった製品までの広い範囲でのJIS制定・改定の委員会を統括するとともに、永きにわたり土木技術専門委員会の委員長を務めた。この業績に対して2002年には藍綬褒章が授与されている。

祝賀会は、まず発起人を代表して富田六郎氏(元太平洋セメント(株)常務)が挨拶し、今回の叙勲申請書類を取りまとめた岩波光保教授(東京工業大学)が乾杯の音頭を取った。その後しばらく懇談が行われ、日本コンクリート工学会の丸山久一会長(長岡技術科学大学名誉教授)、上村克郎氏(元建築研究所長)、前田又兵衛氏(前田建設工業(株)総代)、篠田佳男氏(日本コンクリート技術(株)社長)が祝辞を述べられた。続いて御子息の重博氏(理化学研究所長瀧天体ビッグバン研究室)から長瀧氏のエピソードが紹介され会場を和ませた。最後にお礼の挨拶に立った長瀧氏は、50年に及ぶ大学の研究生活を通じ、これまでに424編の論文、23冊の著書、17の受賞歴、さらには計246の行政や学協会の委員会等に参加してきたことを紹介、東工大ニュースに掲載された受章の感想をスクリーンで示し「1965年は東工大土木工学科に初めて2年生として学生を受け入れた年です。そのた

め、建物を始め研究設備など何も無い状態から研究室が発足しました。しかし、それは逆の見方をすれば、伝統や先達に拘束されず、自由に研究テーマを選べることに繋がります。おかげで、若さに任せて研究室の人たちとがむしゃらに研究することができました。家庭で食事をするのは日曜のみ、子供たちの教育も家内に任せっきりでした。しかし、このことで研究室の若い人達との連携が強まり、教育・研究の成果が上がると共に、後継者も育ち、現在、北海道から九州まで20名に近い研究室卒業生が大学の研究者として研究を続けており、他大学の教授から羨ましがられています。また、企業においても研究畑を志望した卒業生が多くみられ、学会の開催地ではいつも楽しく研究室の卒業生と酒を酌み交わしながらの議論が今でも続いています。このような研究環境を作っていた皆様と家族にお礼を申し上げたいと謝辞を述べた。東工大時代の卒業生の最後であった加藤絵乃氏(港湾空港研究所構造研究グループ長)が出席者を代表して花束を贈呈、最後に鈴木健一氏(鹿島建設(株)専務)が三本で締めて閉会となった。



加藤氏から花束を受ける長瀧名誉教授